

# Newsletter

2008. Jan. No. 11



## 挫折の先に見えてくる 「モノ」

基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」座長  
伊藤行雄（経済学部）

に数えられると思います。慶應義塾のよ  
うに伝統ある学部で新しい制度やカリ  
キュラムをつくることは、そう簡単なこ  
とではありません。伝統は大事にしなければ  
なりませんが、伝統の重石は、それ  
を動かそうとする人のパワーを時として  
圧倒してしまうことが多いのが現状です。

トップダウンには良さと弊害が付きも

「モノを創る」とは今年の日吉キャンパス公開講座の総テーマ  
であり、さまざまな分野の講師の方々が「モノ」という抽象的  
な概念を独自の方法でわかりやすく解題してくださり、毎回参  
加して下さった 200 人以上の市民や学生の皆さんも大いに満足  
して下さったと聞いております。

「モノを創る」と聞けば、文系の人間ならば論文を書く、ある  
いは創作を手懸けている人は詩や小説を書く、音楽を作るという  
行為を浮かべるのは当然のことでしょう。この公開講座の講師  
でもあり、趣旨を書いて下さった荒金直人氏の言葉によれば、  
われわれは文化的なものを創作し、「社会的なものを（たとえば  
法律、人間関係、公共空間など）を構築します。既存の世界を  
受動的に受け止めることに満足せずに新たなモノを創り出す力、  
これこそが生命の本質かもしれません」とモノを創ることの意  
味をわかりやすくまとめてくださっています。

さて、上記の「社会的なモノ」のうち大学の制度もそのひとつ

のです。慶應義塾は一部の人間の考えで全体を支配できないシス  
テムになっていること自体、独立自尊の精神が反映しているとい  
えるでしょう。しかし、学部間には少し低くなったとはいえ、大  
きな壁があることは否定できません。幸い日吉で行われている各  
学部共通の総合教育科目は、各学部の学生が一緒になって講義を  
聴ける制度になっています。しかしながら、学部を越えて共通科  
目の内容を論じる場がないことは、新制大学以降、さらには大綱  
化以降も設置されず今日に至っています。この問題を議論できる  
場をつくり、各学部の垣根を低くすることで、学部間の共通単位  
認定、副専攻制などの新しい制度をつくり出すことが可能となっ  
てきます。改革は挫折と漸進の繰り返しではありますが、挫折の経  
験は必ず改革への養分となって蓄積されていきます。私は「基盤  
研究」の座長として頓挫も挫折も恐れずに現実に沿ったカリキュ  
ラム分析と新たな制度に関しての案づくりにメンバーのみなさん  
と協力して、提案を繰り返していくつもりです。

## CONTENTS

|   |           |                                                                                                                                           |
|---|-----------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | 巻頭言       | 挫折の先に見えてくる「モノ」                                                                                                                            |
| 2 | 特集        | 教養研究センター 5 周年記念座談会<br>日吉キャンパスにおける教養と研究・教育のこれから<br>村井 純（常任理事）・朝吹亮二（法学部日吉主任）・<br>羽田 功（教養研究センター前所長）・横山千晶（教養研究センター所長）<br>司会：佐藤 望（教養研究センター副所長） |
| 5 | 活動報告      | 学術フロンティア「超表象デジタル研究」プロジェクト<br>基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究Ⅱ」<br>基盤研究「身体知プロジェクト」<br>教員サポート<br>極東証券寄附講座「生命の教養学」<br>2007 年度日吉キャンパス公開講座<br>サイエンス・カフェ |
| 8 | ニュースフラッシュ |                                                                                                                                           |
| 8 | 事務局だより    | 研究から学ぶこと                                                                                                                                  |



新しく選ばれた教養研究  
センターロゴ（8 頁）  
最優秀賞：原田潤君作品

教養研究センター 5 周年記念座談会

# 日吉キャンパスにおける教養と研究・教育のこれから

多くの学生にとって入口であり、導入教育の最重要部分を担う日吉キャンパス。その日吉キャンパスにある教養研究センターは、2002 年の開所以来、研究と教育の交差点としての役割を担ってきました。今回の座談会では日吉と三田を遠隔会議システムで結び、教養研究センターの歩みを振り返りながら、新しいキャンパスの未来と研究・教育のあり方について語っていただきました。

## ■ 日吉キャンパスと教養研究センター

**佐藤：**いま、日吉キャンパスは慶應義塾創立 150 年を機に大学院の新設、社会連携施設の整備など、大きな転換が図られています。村井先生は矢上、SFC、そして常に研究現場の最先端にいらっしゃいました。常任理事というお立場から、慶應義塾のなかで日吉キャンパスがどのような役割を担うとお考えですか。

**村井：**日吉キャンパスはこれから 5 年のうちに大きく変化していくキャンパスですから、必然的にライフスタイルなども変わっていくでしょう。大きくふたつの側面から日吉の役割を捉えてみたいと思います。まずひとつは、本質的に変わらない側面で「アカデミズムの面でのエントリーキャンパス」ということです。私は塾高出身なので、比較的身近に日吉キャンパスを見ていましたが、それでも大学生になってみると、何を勉強していくのだろうという不安を覚えたことを思い出します。いろいろなものと出会い、いろいろなものの重要性を認識していくことによって自分の道を見出していく、そういう基本的な役割を日吉キャンパスは果たしていくのではないのでしょうか。そして、もうひとつは「慶應義塾の中で融合・複合といった視点をもったキャンパス」という期待です。これからの社会では、グローバルな視点はもちろん、ひとつの分野に特化した専門性だけではなく、融合的な力、ハイブリッドな力を持っていることが強く求められます。複合・融合領域の研究分野を強化することで、新たな視点を持ち、クリエイティブな人材を輩出していく。そういう構想のもとに、新大学院が設立されるわけです。「エントリー×融合」というふたつの側面から日吉キャンパスの機能が充実していくのではないかと考えています。

**佐藤：**教養研究センターが設立されて 5 年になりますが、村井先生がおっしゃった「エントリー×融合」というふたつの側面から日吉キャンパスはどのように変わりましたか。また、最近の日吉キャンパスの変化をどのように見ていらっしゃいますか。

**朝吹：**日吉キャンパスにおける教育は、大きく **3 つの段階**で変化してきていると言えるのではないのでしょうか。まず、**大綱化以前**は「語学＋一般教育」ということで、本当に基礎的な科目を教えるキャンパスでした。次に、1991 年の**大綱化直後**は「一般教養」「専門」という境界がなくなったことで、4 年間のプログラムを自由に組み立てられるようになりました。これによって 4 年間外国語を学ぶことも、専門科目を 1 年次からステップアップして学んでいくこともできるようになったわけです。しかし、その一方で、縦の学部教育の充実が優先されたこともあって、横での科目のつながりに対する視点がおろそかになっていたのではないかと思うのです。そして、**教養研究センター設立後**は、学部を超えた教育の展開、**横の広がりやつながりが実践**されつつあると思います。村井先生のおっしゃった「複合・融合領域への可能性を秘めたキャンパス」というご発言はたいへんうれしいですし、それを追求していくことこそ、教養研究センターの役割だと考えています。

## ■ 教養研究センターのこれまでと現在

**佐藤：**いま「**縦と横の教育**」というご発言がありましたが、教養研究センター設立後、とくに横の教育の連携が広がってきたと思います。教養研究センター立ち上げの理念がどのようなもので、それがこの 5 年間でどこまで達成されたか、そ



村井 純（常任理事）・朝吹亮二（法学部日吉主任）  
羽田 功（教養研究センター前所長）・横山千晶（教養研究センター所長）  
司会：佐藤 望（教養研究センター副所長）

して今後、どこに向かおうとしているのかをお聞かせください。

羽田：先ほど村井先生がおっしゃった「エントリー×融合」という視点は、教養研究センターがその立ち上げの理念として持っていました。日本の大学には、大綱化によって「教養教育の見直し」と「大学院の高度化（先端研究の追究）」という大きなふたつの流れがありました。そういう流れのなかで、教養研究センターとしては導入教育の充実と学生の知的体力の養成に力を入れてきました。「大学とは知の共同体（コミュニティ）である」という言い方ができるとしていますが、学生をその構成員にしていく、そしてそこで活躍できるようにするために学生に対して何が提供できるのかを考え、実践することがセンターの最大の課題だろうと考えています。その意味で**全人教育の場**としての日吉キャンパスをつなぐコアとして、学部を超えた研究員が集う教養研究センターが研究・教育をどのようにつなげていけばよいのかを常に念頭においていましたし、そういう努力をしてきたつもりです。

横山：大綱化以降、**大学はサバイバルの時代に入った**と認識しています。私が教養研究センター所長として現在強く感じているのは、まさに教員同士のつながりがないと教員がサバイバルできないということです。と言いますのは、いまの学生はさまざまなツールを使って情報を収集し、その結果、価値観が非常に多様化・複雑化しています。そういう時代に、学生たちにどうやって知的な基礎体力をつけさせていくかは教員としての大きな問題です。先ほどお話のあった「ハイブリッドな力」「横の連携」というのは的を射ており、私たちがタコツボ的な学問領域からの脱却を図り、手を携えながら知の伝達をしていかなければならないと実感しています。羽田先生のおっしゃった理念を引き継ぐためにも、教員同士をつなげ、新しい知をどうやって生み出し、柔軟なものの見方と知的体力を学生に身に付けさせるための方策を模索しなければならない、そういう意識を教員に強く持ってもらわなければならないと考えています。

村井：先ほど「全人的」という話が出ましたが、知的体力は

もちろんですが、「**勇気と自信**」を与えてほしいと思います。というのは、私自身、先生とのコミュニケーションを通して勇気と自信をもらった記憶があるからです。アカデミズムに対するアプローチ方法もいいのですが、たとえば、社会現象の裏側には複合的な要素が組み合わさっている、といったことを知ることの喜びが自信となり、学問に向かっていく勇気を与えてくれるのではないかと思います。キャンパスライフは「**学問＋人間形成**」なわけですから。

## ■ 変化する日吉キャンパス

佐藤：さて、少し話を移していきたいと思います。来年、新しい大学院がふたつ日吉に設立されますが、それによって大学はどう変わっていくのか。そして新大学院の意義は何かについてお話をお聞かせください。

村井：非常に単純に言ってしまうと、「システムデザイン・マネジメント研究科」はある事象を捉えるときにグローバルな視点に立って物事を考えられるか、そして「メディアデザイン研究科」はメディアやコミュニケーションの変化を教養、知識、言語、情報といった視点から捉えられるか、ということを最大のテーマにしています。つまり、未来を見据えるときにテクノロジーだとかマネジメント、リーガル、カルチャー



などの個別の問題にとらわれすぎずに、研究を進めるということです。そういう意味では、日吉キャンパスの使命とうまく調和できるのではないかと期待しています。また、塾高生を巻き込んだ展開の可能性にも期待していますし、先ほどからお聞きしている教養研究センターの理念の延長線上にあるのではないかと考えます。

**朝吹:**いまの村井先生のお話を伺っていて、**福澤先生の「社中」思想**がぴったりなのかなと思いました。つまり、慶應義塾は幼稚園から大学院までの縦のつながりでもって教育を実践しているわけです。日吉には普通部から考えれば年齢的にもちょうど真ん中の生徒・学生が集まっており、その意味でキャンパスとしても中心的な役割を担うのではないかと思います。教養研究センターで主催している、一貫校を巻き込んだ「声のプロジェクト」などはその象徴的なプログラムで、**教養研究センターは慶應義塾全体の縦・横の中心**として機能していかなければならないのでしょうし、大学の枠にとどまらない役割を果たしていかなければならないのではないのでしょうか。

## ■ これからの時代の教養とは

**佐藤:** 教養研究センターにどのような期待をお持ちでしょうか。これまで「専門性から学際性へ」ということが言われ続けていますが、「浅く、広い」ではなく、「深く、広い」**教養・学問**は可能だと思われませんか。

**村井:** 私の強い信念は「**学生の力は無限である**」ということです。したがって、「深く深く、広く広く」で絶対に大丈夫でしょう。人間の能力に限界はありませんし、人間はいかようにも成長できると信じています。次の世代はわれわれを踏み台にして、さらに先を追究していくことになるわけですから、学生には「自分はこれだけできる」という内面からの自信、そして「やってやろう」という勇気を身につけてもらいたいと思っています。逆に皆さんにお聞きしたいのですが、地球規模で物事を考えさせるための教育はどうあるべきなのでしょうか。

**横山:** 私が現在学生といっしょに勉強していることのひとつは**環境問題**です。世界全体で代替エネルギーやエコリビング、そして二酸化炭素排出権取り引きといったことが話題になっています。そういう潮流を端で見たときに何が見えてくるか。つまり、物事は中に入らなければわからないことと、逆に外にいるからこそわかることがあると思うのです。そのふたつの視点を同時に身につけさせること、まずは客観的に物事を

見極め、次にその流れの中に入っていくという二段階が必要なのではないでしょうか。

**羽田:** 教養研究センターで行ってきた学術フロンティアが最終年度を迎え、概要がまとまりつつあります。**教養教育の慶應モデル**をつくるのが目的だったのですが、「**コンテンツ**」と「**場**」の問題を総合的に考えました。日吉キャンパスでは長年、センター主催の入学生歓迎行事をやってきましたが、そこに通底するテーマは「心と体と頭と」です。今回の学術フロンティアの理念も基本的にはこの「心と体と頭」の解放から出発しています。まず、高校までとは違う世界に入ってきて自分をどれだけ解放できるかということを目的としています。次に、研究成果の骨子ですが、近景（自分を見つめて理解する）・中景（周りを見渡して他者との関係を築く）・遠景（それが広がって地球全体を理解する）という三段階の教育プログラムを考えました。今度資料をお届けしますので、ぜひご覧になってください。トータルで言えば「**バリアフリー**」ということです。知らないうちに身につけてしまったバリアをどうやって壊していけるのか、そしてバリアを壊していく過程で自分を見つめるメタの視点も獲得できるでしょう。その結果、自律的な学習者を養成できるのではないかと考えているわけです。

## ■ 教養研究センターの課題と理想像

**佐藤:** 最後に、教養研究センターの課題と理想像について語っていただきたいと思います。

**羽田:** 今日話題になった、**生きていくうえでの基盤、知的体力をつけるという役割**は教養教育では不変だと思います。ただ、われわれを取り巻く環境が変化していることは事実ですから、コアの部分とその変化に敏感に対応した側面をどのように取り入れていくのか、というふたつを柔軟に組み合わせしていく姿勢を確立していくこと、そしてこれまでに確立したネットワークをさらに広げ、活用していくことが今後の課題でしょう。

**横山:** 先ほど朝吹先生もおっしゃいましたが、大学院までを含めた一貫校の問題が課題でしょう。いまは大学を中心とした教養研究センターの活動ですが、幼稚園から大学院までの**縦のつながり**、同じ組織内の教職員同士の**横のつながり**、そして地域社会を含めた**外部とのつながり**をもっと活性化していかなければならないと思っています。

**佐藤:** 本日はお忙しいなか、本当にありがとうございました。

## 学術フロンティア「超表象デジタル研究」プロジェクト

3年計画で進められてきた本研究センター特定研究・学術フロンティア「超表象デジタル研究」プロジェクトも最終年度を迎えております。

今年度当初、本プロジェクトは2007年末に最終成果の概要をまとめて文部科学省に提出し、さらに残りの3カ月で3年間の研究を総合する作業を予定しておりましたが、8月半ばになって、概要提出期限が急遽9月末に早まりました。予定外の変更ではありましたが、統合研究ボードを中心に、2年半にわたって各研究ユニットとユニットに属する各研究グループがそれぞれの役割に応じた活動を積極

的・計画的・持続的に展開してきたおかげで、夏休み中の変更、限られた時間というかなり厳しい制約の中で最終成果「21世紀型キャンパス構想——バリアフリー・キャンパスの構築を目指して」の概要を取りまとめることができました。この間、統合研究ボードと共に多大な時間とエネルギーを投じて協働作業にかかりきりとなった学術フロンティアならびに教養研究センター事務局はもとより、取りまとめ作業に全面的に協力してくださった日吉研究支援センターの皆さんに、この紙面を借りてあらためてお礼を申し上げます。

「21世紀キャンパス構想」は新しい教養教育の慶應モデルとして構想されており、具体的なカリキュラムとそれが展開されるべき「場」を示すと共に、これを取り囲むさまざまなプログラムや必要な制度・機関なども包括するものです。2008年4月末には報告会を兼ねたシンポジウムの開催を予定していますので、ぜひその際に全貌に触れていただきたいと思います。それまでに今回の概要をさらにブラッシュアップさせるべく、プロジェクト一丸となって残された時間を活用するつもりです。

(羽田 功)

## 基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究Ⅱ」

この研究は、大学の環境が変化するなかで、大学が次代に伝えていくべき知の体系および教養のあり方を再検討する研究です。これまで、日吉設置学部共通総合教育科目に関する研究(2003～2004年)、学生アンケート調査や成績評価、学部カリキュラム比較調査を含むカリキュラム研究(2005～2006年)を行い、研究報告と提言を行ってきました。

2007年からは2年計画で、4年間を見据えた教養教育のあり方に関する研究活動を行っています。これまでの研究成果の上に立って、履修制度、成績評価、継続した教養教育にかかる諸問題を解決するための方策を明らかにしようとしています。最終的には、学士課程4年間を通しての教養教育の理念を確立するとともに、実際の科目を想定してのカリキュラム・モデル化を目標にしています。現実に即し地に足をつけた効果的な教養教育のカリキュラム実現への提言を目指して

います。

今年度はこれまでに、学事センターの担当者を招いてのセメスター制度に関する勉強会(10月15日)、法学部の副専攻制度および経済学部の研究プロジェクト制度についての勉強会(11月7日)、成績評価に関する勉強会(12月12日)などを行ってきました。現在各学部の学期制度についての詳細な比較調査も進めています。最終的には、2008年度末に提言を含む報告書を提示する予定です。

本研究会は、義塾の学部・諸研究所スタッフおよび

職員スタッフの方々に対してオープンに行っています。研究会の予定や活動記録等に関しては、<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/kiban1/> をご覧ください。か、教養研究センター事務局にお問い合わせください。

(佐藤 望)





## 基盤研究「身体知プロジェクト」

2006 年度秋学期に行われた実験授業「体をひらく、心をひらく」に引き続き、2007 年度も実験授業が開催されました。今回は「アートで体をひらく、心をひらく」の題名で、昨年度に引き続き、普段とは違う表現方法でこの身体の中にいる自分を見つめ、そこを基点に他人とつながるさまざまなワークショップを行っています。11 月 14 日には特別ワークショップとして、カナダ王立音楽院からふたりの講師をお招きして、教科目の学習にダンスや音楽、絵画、ドラマなどのアート表現を取り入れてどのように教育効果をあげることができるのか、学生・教員・職員がともに学び合う機会を設けました。続いて 11 月 30 日、12 月 10 日には、表

現アートセラピーの実践者として名高い小野京子氏を講師としてお招きし、粘土やクレヨンを使った造形・絵画表現を元に、グループで芸術表現による「物語」をつくったり、これらの表現をもとに身体を動かすことで、自分の内面と向き合うワークショップや、自分の身体と他人の身体を意識する試みを展開しました。実験授業はいまもまだ継続中です。参加者の中間アンケートでは、ことばを交わさなくともお互いに気持ちの通じ合う不思議や、自分の中のいままで気がつかなかった側面に気づき、それを肯定的にとらえることができた喜びを読み取ることができました。

本プロジェクトでは、実践と同時に月

例研究会を開催し、「身体知」に関する理論研究も行っています。2007 年度は心理学や文学、美術、音楽などの異分野で身体と向き合っている三田と日吉の教員を含めた慶應義塾のメンバーに加え、河野哲也氏（哲学・玉川大学）と中島智氏（美術・武蔵野美術大学）をメンバーにお迎えし、教育の中にどのように身体へのまなざしを構築していけるのかを模索中です。議論から得た知見に基づいた授業を展開していくことが、次の目標です。実験授業も研究会も公開形式です。奮ってご参加ください。詳しくは教養研究センターのホームページをご覧ください。

（横山千晶）

## 教員サポート

カリキュラム改革の進展に伴い、従来とは性格の異なる授業を日吉の教員が担当する機会が増えています。一例がメディアアリティラシーやフィールドワークを活用した少人数のセミナー形式の授業です。この種の授業では、必ずしも教員が精通しているとはいえない分野や研究方法を指導しなければならない場面に遭遇する

ことがあります。また近年、レポートが書けない、時間を守れない、他者とうまくコミュニケーションがとれない、といった“発達障害”を思わせる症状を持つ学生に接する機会も増えています。教養研究センターでは、こうした新しい状況に置かれた教員をサポートし、よりよい教育研究を実現したり、より適切な学生とのコミュニケーションを図るための一助として、教員サポートプロジェクトを、日吉メディアセンター、日吉 ITC、学生総合センター日吉支部と共催の形で展開することになりました。

メディアセンターとの共催では、ベーシック編として「少人数セミナー授業での実践ワー

クショップ」と題し、6 月 20 日・25 日、11 月 27 日の 3 回、ステップアップ編として「文献管理ソフト RefWorks 利用法」と題し、12 月 5 日に 1 回、教育研究に活用できる効果的な方法を提案しました。また「社会調査法—最初の一步」と題し、11 月 13 日・16 日の 2 回、社会調査法に関する基本概念や注意点を質疑応答形式で紹介しました。さらに ITC との共催では、「Keio.jp 活用法」と銘打ち、12 月 12 日・17 日の 2 回、開発担当者の応援の下、教員・学生の一人二役で各種の教育支援システムを実地体験できる機会を提供しました。なお、今年 1 月には、学生総合センターとの共催で“発達障害”を抱える学生について理解を深めるためのワークショップを開催する予定です。

（萩原眞一）



## 極東証券寄附講座「生命の教養学」

極東証券寄附講座「生命の教養学」は、「生命の時代」であり、同時に「生き難い時代」でもある21世紀にふさわしい知の体得を目指し、理系・文系を横断する諸分野から講師を招いて授業を展開しています。2007年度の授業（春学期開講）は、中島陽子、吉田泰将、武藤浩史の3名をコーディネーターとして、「誕生と死——その間にいる君たちへ」というサブタイトルを付け、これについて医学、宗教、生物学、人類学、文学などの分野から多彩な講師陣を迎え

て、「生命をどう捉えるか？」という問題をめぐる思考のさまざまな手立てを学生に伝えました。

講師と講義テーマは次の通りです。波平恵美子（お茶の水大学）「命の文化人類学」、日野原重明（聖路加国際病院）「子どもへのいのちの教育」、松原洋子（立命館大学）「優生学と生命倫理」、吉村泰典（塾医学部）「生殖医療と生命倫理」、対本宗訓（帝京大学医学部付属溝口病院、僧侶）「僧医という視座より」、堀進悟（塾医学部）

「Basic Life Support と塾 BLS 教育について」、松本緑（塾理工学部）「生物たちの生殖戦略」、鈴木忠（塾医学部）「クマムシの生き方」、田沼靖一（東京理科大学）「死の遺伝子からの問いかけ」、吉田泰将（塾体育研究所）「体験！救命救急・CPR + AED の実際」、武藤浩史（塾法学部）「井戸の中から——村上春樹と『ピーターパン』」。

日野原氏の講義は、別室にテレビ中継して、一般に公開しました。

（武藤浩史）

## 2007 年度日吉キャンパス公開講座

本年度は、公開講座に関して、新たな試みとして、運営委員の先生方を4つのグループに分けて、それぞれ何ができるかを討論してもらい、そこからアイデアや人選を行ってもらいました。0) ものづくりとは何かといった哲学的なアプローチ、1) モノを創ることの表象文化的アプローチ、2) 音をつくる、絵を描くといった芸術的な観点からのアプローチ、3) 街づくりといった都市計画や都市活性化という社会科学的見地からのアプローチ、4) 生物や量子コンピュータといった生物

学物理学的アプローチによって、モノを創ることの幅広く深遠な議論が展開できました。慶大生を巻き込んで、モノづくりのプロセスを見せてくれた講師のプレゼンテーションには、受講者の方々は釘付けでした。本年度は、例年より、応募数が多く、300名を超えました。それだけ地域住民の皆さんの〈ものづくり〉への関心が高いということではないでしょうか。10週にわたる2コマ授業には熱心な質問者も多く、熱気が感じられました。受講者の平均年齢が、59歳ということで

すが、もう少し若い方々にも参加できるように、ますます魅力的な講座をつくりたいと思います。

（小淵昭夫）



## サイエンス・カフェ

サイエンス・カフェも第2回「小さなクラグの世界（9月1日）」竹田典代（理工学部）、第3回「コケを探して：フィールドサイエンスの楽しみ（11月10日）」有川智己（経済学部）と回を重ね、第4回は1月26日に牛場潤一（理工学部）が手足の不自由な方の生活をサポートする技術、「融合する脳と機械」が予定されており、事務の協力を得て楽しい時間が提供できて

います。また、(独) 科学技術振興機構 (JST) が主催する「サイエンスカフェポスター展 in サイエンスアゴラ 2007 (11月23-25日)」に参加し、他のカフェだけでなく多くのサイエンス発信の試みを知り、交流することができました。我々のカフェは参加者年齢幅の広さ（子どもたちの参加）が、会場の利点などとともに注目されました。出展は慶應のサイエンス・カフェのあり方につい

て考察する機会でもありました。どうあるべきかの理念を明確に打ち出すことは企画を成功させるのには大事なことですが、お客あってのお店ですから、参加者と一緒に育てていくというのでもよいのではないかと、個人的には考えています。マニアが多いときには双方向性を強調し、子どもたちがきてくれるなら、楽しくわかりやすくを努めるということです。（中島陽子）

## Hiyoshi Research Portfolio (HRP) 2007

12月7日(金)より、日吉研究支援センター HP 内において、HRP 2007 が開催されています。教養研究センターでは計 12 枚のパネルを作成し、主に 2006 年度後半から 2007 年度にかけての活動について発表しています。

各ポスターのタイトルは、①慶應義塾大学の教育カリキュラム研究、②身体知プロジェクト、③「特定研究超表象デジタル研究」—表象文化に関する融合研究に基づくリベラル・アーツ教育のモデル構築—、④教員サポートプロジェクト、⑤サイエンス・カフェ—極東証券寄附講座一般公開ゼミとなっています。皆様どうぞサイトにお立ち寄りの上、各パネルでセンターの活動をご覧ください ([http://www.hc.keio.ac.jp/ora/HRP/pdf/2007/yokoyama\\_chiaki.pdf](http://www.hc.keio.ac.jp/ora/HRP/pdf/2007/yokoyama_chiaki.pdf))。

## アカデミック・スキルズ プレゼンテーション・コンペティション

2007 年度は「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」に加え、Ⅰ・Ⅱの上級編「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」が 2 コマ開講されました。どのクラスも現在最終論文の仕上げに取り組んでいるところです。今年もクラスでのリサーチの成果を公表すべく、来たる 2 月 6 日にアカデミック・スキルズ履修者の代表によるプレゼンテーション・コンペティションが極東証券株式会社の社長をお招きして開催されます。実験授業「スタディ・スキルズ」として始まったこの授業も今年で 5 年目を迎えることになり、恒例となった期

末プレゼンテーション・コンペティションも 3 年目を迎えます。代表者の選出を始めとし、コンペティションの準備と運営は、すべて履修者の学生たちによるものです。昨年は、他大学からの視聴者も大勢参加して下さったこのコンペティション、今年も多くの方が学生たちの日ごろの成果を、その眼と耳で確かめにいらっしやることを期待しています。

(横山千晶)

## 教養研究センター「ロゴ」デザイン コンペティション

今年度のホームページの更新を機会に、新しい「ロゴ」デザインを募集しました。2007 年 9 月 25 日(火)に締め切れ、12 名より 17 作品の応募がありました。どれも力作揃いで、審査は非常に難航しました。審査員による数回にわたる投票の末、最優秀賞 原田潤君(塾員)、佳作 木原佑介君(塾員)、佳作 大久保佐太郎君(経済学部 3 年)の 3 名が入賞となりました。このうち原田潤君の作品を今後教養研究センターのロゴとして使用することになりました。入賞者の皆さんおめでとうございました。そして、たくさんのご応募をありがとうございました。

(佐藤 望)



佳作：木原佑介君作品(右)、  
大久保佐太郎君作品(左)

## 「事務局だより」研究から学ぶこと

2007 年 4 月より、教養研究センター学術フロンティアの事務局として、プロジェクトメンバーの先生方のお手伝いをさせていただいております。研究資金管理だけでなく、講演会等のイベント開催のお手伝い、各種事務手続き、さらには文部科学省へ提出する成果報告書概要の作成支援を通じて、ようやく「超表象デジタル研究」への理解に近づくことができたような気がいたします。

プロジェクトでは現在、最終成果報告に向けて準備を進めておりますが、この研

究の集大成として構築される新たなリベラル・アーツ教育(教養教育)モデルに私もとても興味を持っており、その完成が楽しみです。私自身も慶應義塾の卒業生なのですが、自分が塾生だった頃は特に考えることのなかった教養教育について、このような形で触れることができ、大学教育について考える機会を得たことをとても嬉しく思います。自分自身の学ぶことと生きること意識するようになり、この研究に関われたことをとても貴重な経験だと思っています。また、塾生のときには知らなかつ

た大学の事務の現場を経験することができ、慶應義塾についても新たな発見をすることがあり、母校で働けることを嬉しく感じております。

この学術フロンティアの期間が残りの期間が残りわずかとなり、寂しい思いもありますが、研究者の方々とコミュニケーションを大切にしながら残りの期間を充実させたいと考えております。そして、プロジェクトの終了とともに自分自身の成長についても成果を得ることができるように努力を続けたいと思います。

(山下美香子)